

# アプローチカリキュラム編成の手引

## 理論編

### I 接続期における教育課程・保育課程について

ここでは、次の五つの柱で、アプローチカリキュラムを編成する際の理論について述べています。

- 1 アプローチカリキュラムとは何か
- 2 なぜ、アプローチカリキュラムが必要か
- 3 幼児の発達や学びとは
- 4 幼児期に育てたい力を確認しよう
- 5 指導をつなげよう



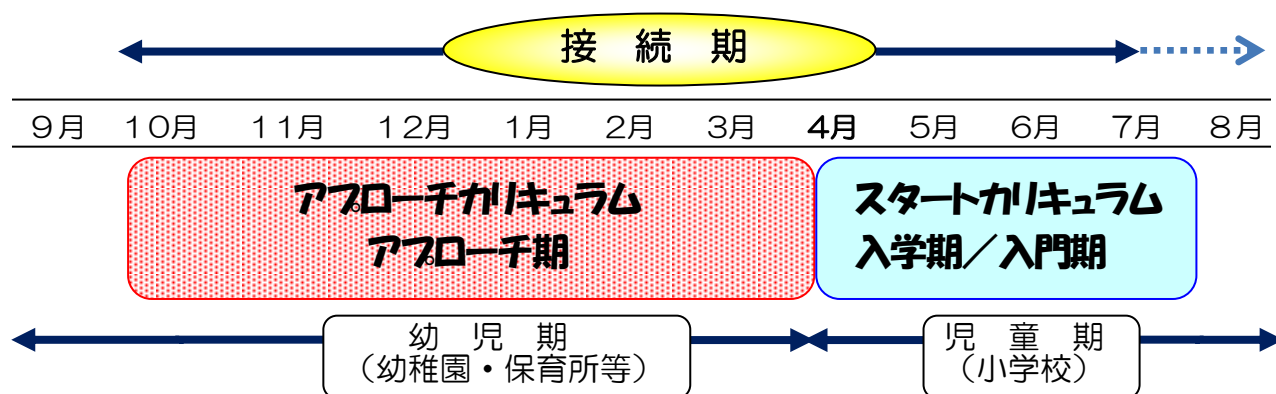
## I 接続期における教育課程・保育課程について

### 1 アプローチカリキュラムとは何か

幼児の発達や学びの連続性を保障するためには、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが重要です。

愛知県幼児教育研究協議会では、幼児期（5歳児後期）から、児童期（一年生前期）の期間を接続期として捉えて、接続期の指導を見直していきたいと考えました。

そこで、接続期の就学前を「アプローチ期」、就学後を「スタート期（入学期・入門期）」とし、アプローチ期＜幼児教育の最終段階である5歳児の後期（10月～3月）＞における教育課程・保育課程のことを『アプローチカリキュラム』と呼ぶこととしました。



【参照P25 資料1 スタートカリキュラム とは】

幼児期の教育は、その後の学校教育全体の生活や学習の基礎を培う役割を担っています。この基礎を培うとは、小学校以降の子どもの発達を見通した上で、幼児期に育てるべきことを幼児期にふさわしい生活（教師との信頼関係に支えられた生活、興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活、友達と十分に関わって展開する生活）を通して、しっかり育てることです。

その意味で「アプローチ」というのは、小学校教育に適應するための準備ではなく、幼児期の終わりまでに育ててほしいことを具体的に明らかにし、一人一人にその力が育っているかを確認、修了までに育てることを目指すことが、小学校教育につながっていくという考えの下に「アプローチ」と使っています。

また、「アプローチ期」を5歳児の10月～3月としたのは、幼児の発達として、「人間関係が深まり、学び合いが可能となる時期」であり、具体的には、“友達とともに探究する”、“興味・関心が深まる”、“自分に気付く”、“小学校への期待が膨らむ”などの姿が見られるようになる時期だからです。

## 2 なぜ、アプローチカリキュラムが必要か

それぞれの園において、教育課程・保育課程は編成されているものの、アプローチ期に何を重視して小学校への就学につなげていくのか、明確になっていないという問題点があります。そこで、幼児期に育つ力が、小学校においてどのように発揮されていくのかを、保育者が見通して、保育を行うことが大切です。

そのためには、今ある教育課程・保育課程を見直し、就学前のアプローチカリキュラムとして改善・充実することが必要なのです。

### (1) 接続における現状の問題点と課題

幼児は、幼稚園・保育所等の生活から、小学校の生活や学習へ移行すると、その違いに段差を感じ、戸惑うことも少なくありません。しかし、この段差は、幼児期と児童期の発達の特性により教育の目標や内容、方法、評価が大きく異なることから生じるものであり、大切なのは、幼児が自分の力で段差を乗り越えていくことができるように、保育者が支えていくことです。そのためには、保育者が幼児期の教育と小学校教育の違いを把握し、幼児の育ちや幼児を取り巻く環境についての問題点や課題をはっきりと意識して保育に取り組むことが重要です。

幼児の育ちや幼児を取り巻く環境（家庭環境・社会の状況等）についての問題点や課題はたくさんありますが、「愛知の幼児教育指針」に表記されている中から、接続においては、次のような問題点と課題が挙げられます。

#### ① 幼児の育ちについて

##### 問題点



- 思い通りにならないとき、我慢する力が弱くなってきている。
- 実体験が乏しくなってきている。
- 相手の気持ちを察することができにくくなっている。
- 話をする人に注意が向けられない、保育者の指示が個別では伝わるが、全体の場では伝わりにくいことがある。



##### 課題

自分に自信をもち、周りの人と協調しながら生活していく子どもに育て小学校へ送り出す必要がある

## ② 幼稚園や保育所等の保育について

### 問題点

- 幼稚園・保育所等の保育の在り方、考え方の違い、「幼児期の教育」の捉え方に、ばらつきがある。
- 小学校教育を先取りした教科指導や偏った活動など、幼児の発達に沿わない取組が見られる。

### 課題

- 幼稚園・保育所等が、就学前の教育について、幼稚園教育要領や保育所保育指針に基づいた教育内容の共通理解を図る必要がある。
- 小学校の学習や生活について十分理解し、幼児期の教育がどのようにつながっていくのか意識して保育していくことが必要である。



## ③ 幼稚園や保育所等と小学校との連携・接続について

### 問題点

- 一つの幼稚園・保育所等から複数の小学校に入学したり、一つの小学校に複数の幼稚園・保育所等から入学したりするなど、連携しにくい状況にある。
- 幼児期の教育と小学校教育の連携・接続については取組が進みつつあるが、その状況は市町村によって違いがある。
- 幼保小連携について、連絡会をもつ小学校・幼稚園・保育所等は多いが、互いの教育内容について理解し合うまでには至っていないところが多い。

### 課題

- 互いに幼児期の教育と小学校教育の違いを把握し、それぞれの教育内容を理解し合うことが必要である。
- 幼稚園・保育所等での育ちが小学校でどのような力になるのかを、双方で確認し合い、発達や学びの連続性を保障していくことが大切である。



以上の問題点と課題から、まずは、幼稚園・保育所等が、それぞれの園や地域の実情に応じた、「幼児の育ちの問題点と課題」を具体的に把握し、幼児教育の現場においても研修等を通して、基本理念をしっかりと確認し合い保育に取り組んでいくことが必要です。

そして、全ての幼稚園・保育所等において、小学校就学前に育てたいことを示し、実践していくこと、その際、幼児期に育った力が、小学校にどのようにつながっていくのかを見通すことが大切です。

## (2) 幼保小の接続で大切と考えること

愛知県の教育状況調査（平成25年9月）では、53市町村（名古屋市を除く）の半数以上の市町村が、「年数回の授業、行事、研究会などがあるが、接続を見通した教育課程の編成実施は行われていない」と回答しており、ほとんどの市町村で交流活動等の「連携」については進んでいるものの、「接続」については課題となっているのが現状です。【参照P26 資料2】

そこで、現状の問題点と課題を踏まえてアプローチカリキュラムを編成していくためには、次の点を大切にして接続について考えていきましょう。

### ① アプローチ期の幼児の育ちを明確にしていきたいと思います

幼稚園・保育所等では、ねらいをもって様々な活動をしています。修了までに目指していく、身に付けさせたいこと・育てていきたい力は同じです。アプローチ期の幼児の育ちをどう捉えて、どう小学校へつなげていくかを明らかにしていきたいと思います。

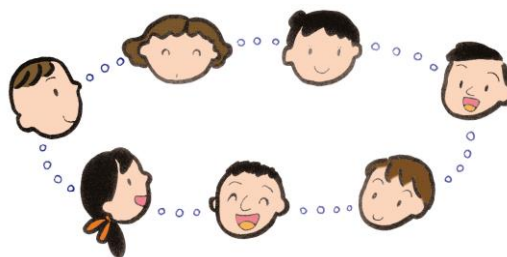
### ② 幼稚園・保育所等や小学校の具体的な活動を見てみましょう

幼稚園・保育所等の保育者と小学校の教師が、互いの保育・教育を知り、教育内容を理解するために、できる限り行事への相互参加や交流活動を行っていくことと、その前後の話し合いの時間や場をもつようにしましょう。

### ③ 連絡会等の情報交換の場では、互いの理解が図られるよう工夫しましょう

“小学校から幼稚園・保育所等で意識して育ててもらいたいことを伝える。” また、“幼稚園・保育所等から、大事にしてきたことを小学校へ伝える。” その際には、互いが具体的な子どもの姿で率直に伝え合うようにしましょう。

自分の目でそれぞれの現場の教育活動を見ること。  
そして、率直な意見交換をすることから始めてみましょう！



## エピソード

### 《ある連絡会で・・・小学校の教師より》

保育所の先生が、「給食の時間では、友達との関わりを大切にしています」と言われました。

友達といろいろなおしゃべりをしながら、楽しく食べるということを知り、小学校の先生方は、大変驚きました。小学校では、まずは、時間内に食べることや、食べる時のマナー、好き嫌いなくバランスよく食べるというようなことが重視されがちです。

この話を聞いて「1年生の子どもたちは、給食の時間に戸惑っているかもしれない、緊張して食べているかもしれない」と初めて気付くことができました。まずは、教職員が互いの違いを知ることにより、歩み寄ることができるように思います。

顔を見合わせて話をしたり、互いに参観し合ったりする機会が必要です。



### 3 幼児の発達や学びとは

#### (1) 幼児の発達の状況の把握

幼児の発達や学びをつなげていくためには、まずは、個人差を考慮しながら、幼児の発達の状況を把握しておくことが大切です。

そのためには、次の視点で捉えていきましょう。

##### ① 信頼する気持ちやあこがれの心情の育ち

- 身近な人への親しみから、信頼感やあこがれをもつようになり、期待に応えようとしたり自分を近付けようとしたりする。



##### ② 活動意欲の高まり

- 周囲の人やものへの興味・関心が広がり、自分から積極的にかかわり、活動の幅を広げていく。
- 身体全体の調和がとれてきて動きがスムーズになり、様々な活動に意欲的に取り組むようになる。

##### ③ 概念形成の育ち

- 言葉や数量等への興味・関心が高まり、自ら言葉を遣い書いたり読んだりする姿が見られ、社会事象や自然事象などに対する認識が高まる。

##### ④ 自立心の育ち

- 大人に指示されなくても、一日の生活の流れを見通しながら次にとるべき行動が分かるようになる。
- 遊びや生活の中で自分のすることに目的や見通しをもち、行動するようになる。
- 規範意識が芽生え、生活のきまりを守り、年長児としての自覚をもって行動するようになる。



##### ⑤ “独自の世界” から、“イメージを共有する世界” へ

- 友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく。

##### ⑥ 仲間と折り合いをつける体験を通しての学び

- 自分の思い通りにならないことも増えるが、我慢できることもある。違う考えや感じ方をする人がいることに気付く。
- 友達と互いに気持ちを分かり合って遊ぶようになる。
- 友達同士で目的をもって協力しながら園生活を展開し深めていく。

## (2) 就学前の保育・子育てで大切にしたいこと

### ① 安心感・安定感 “大人に愛されているという実感が得られるようにする”

「自分はお父さん、お母さんに愛されている」「先生からかわいがられている」という実感を得ることで、子どもは安心感・安定感をもつようになります。

そのために、「子どもはどう受け止めているのか」「子どもはどう感じているのか」ということを子どもの立場に立って考えながら、共感的に子どもの気持ちを受け止め理解していくようにしましょう。

### ② 基本的な生活習慣 “心も体も明るく元気に成長していく生活基盤を築く”

次のような生活が送れるようにしましょう。

◆ 早寝・早起きと十分な睡眠



◆ 規則正しい、豊かで楽しい食事

◆ しっかり体全体を動かす生活

◆ 十分に手先を使う生活



◆ 人とのかかわりの中で声を出して笑う生活

### ③ 学校への期待感 “入学を楽しみにする気持ちを膨らませる”

子どもは小学校へ入学する時、大変な緊張感があります。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんになったね」「さすが、年長さんだね」



「もうすぐ学校へ行けるね」と、子どもとともに成長を喜び、自信をもたせましょう。

## エピソード

### 《就学を前に元気がなくなったA児の姿から》

3学期が始まってからA児の様子に変化が見られます。朝、登園しても、元気がなく、何か疲れているような様子です。心配した保育者は、お母さんに、家庭での様子を聞いてみました。「最近、Aちゃん、元気ないみたいですけど、御家庭ではいかがですか?」「ええ、私もそんなことを感じているんですけど、小学校に行くのが間近になってきたので、少し習い事をさせるようにしたのですが……。」

今までは、A児とお母さんとの会話もたくさんあったのですが、習い事を始めてからは、それに毎日時間をとられて、接する機会が少なくなってしまったようです。「小学校に行くまでに覚えさせたいこともいっぱいあるのですが」とお母さんは心配そうでした。

保護者の焦る気持ちもわかりますが、大切なのは、保護者が就学への期待とともに不安もある幼児の心の揺れを受けとめ、“困ったときはいつでも支えてくれる”と幼児が安心できる「心の安全基地」となることです。保育者は保護者の焦る気持ちを受け止め、習い事をさせなくても「家庭で子どもと一緒にできること」を保護者とともに考えていきましょう。

### (3) 幼児の学びの捉え

幼児の発達や学びを小学校につなげていくためには、幼児が遊びの中で様々なことを学んでいることを理解することが大切です。

そこで、「遊びの意義」「遊びに見られる学びの芽生え」「自己調整力の芽生え」という視点から、幼児の学びを捉えていきましょう。

#### ① 遊びの意義

幼児期は、何でも自分でやってみようとする時期であり、周囲の人やものに興味をもってかかわり、楽しさを感じます。夢中になって対象（人やもの）にかかわる中で多様に動いたり想像力を働かせたり、操作したり構成したりして、遊びを楽しみながら、様々なことが具体的に分かっていきます。

これが、小学校以降の学習の基盤となる「学び」の姿です。だからこそ、「遊び」は幼児の様々な学びを生み出す重要なものなのです。



#### ② 遊びに見られる学びの芽生え

幼児は遊びの中で「学ぶ」ということを意識しているわけではなく、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいきます。

これが「学びの芽生え」であり、この時期は「無自覚な学び」とも言われます。

この時期の幼児には「遊びにおける楽しさからくる意欲」や「遊びに熱中する集中心」「遊びの中での気付き」が生まれてきます。

こうした学びの芽生えが育っていき、それが小学校へ入り、自覚的な学びへと成長していきます。



#### ③ 自己調整力の芽生え

幼児は自己を発揮し、保育者や他の幼児に認められる体験をすることで、自信をもって行動できるようになります。（自己肯定感）そして、自ら行動する力が育ってくると、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや、共通の目的を実現する喜びを味わい、友達と協同して活動する力が育ってきます。その中で互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育ちます。

自己発揮と自己抑制を調整することは、様々な体験の中で育まれていきます。

【参照 P27 資料3 学びの芽生えの時期から自覚的な学びの時期への円滑な移行】



## (4) 学びの芽生えを支える土台となる力

幼児は、早くから教えさえすれば「学力」が身に付くというものではなく、幼児期には、発達に即した「学びの芽生えの土台となる力」を育てていくことが大切です。

本来、幼児は“知りたい”“学びたい”という好奇心や欲求をもっています。また、生活や遊びを通してその欲求を満たす経験を積み重ねることで、「自分はやればできるんだ」という有能感をもち、前向きに取り組む態度を獲得していきます。

そして、幼児はそれぞれの興味・関心に応じ、直接的・具体的な体験などを通して、自分なりに“見付けた”“分かった”“できた”といううれしい実感をもち、積極的に物事にかかわろうとします。



### ① 学びの芽生えの土台は「環境を通して行う教育」の中で育まれる

#### 環境を通して行う教育とは

環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味・関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしいかかわり方を身に付けていくことを意図した教育です。

(幼稚園教育要領解説より)

したがって、遊具や用具、素材だけを配置して、あとは幼児の動くままに任せるといったものでもなく、また、環境に含まれている教育的価値を保育者が取り出して直接幼児に押し付けたり、詰め込んだりするものでもありません。教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、学びの土台は育まれていきます。

### ② 遊びを通して“学ぶことの楽しさ”を知り、積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもたせる

幼児期の教育は保育者があらかじめ立てた目的に沿って、順序立てて言葉で教えられ学習するものではありません。幼児が遊びを通して学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事にかかわろうとする気持ちをもつようになる過程こそ、小学校以降の学習意欲へとつながります。さらに、社会に出てからも物事に主体的に取り組み、自ら考え、様々な問題に積極的に対応し、解決するようになっていきます。

#### “自ら学ぶ意欲”や“自ら学ぶ力”を養うには

幼児教育は、その後の学校教育全体の生活や学習の基礎を培う役割を担っています。この基礎を培うとは、小学校以降の子どもの発達を見通した上で、幼児期に育てるべきことを幼児期にふさわしい生活を通して育てることです。

そのことが小学校以降の生活や学習においても重要な“自ら学ぶ意欲”や“自ら学ぶ力”を養うことにつながります。

### ③ 生活や遊びの中で「学びの芽生えを支える土台となる力」を育てる

「学びの芽生えを支える土台となる力」は、幼児の主体的な遊びの中で育まれます。その力は、保育者との信頼関係に支えられ、友達と十分にかかわって展開する生活において、興味や関心に基づいた直接的な体験を通して伸びていきます。

- 集団の中で温かい人間関係を築き、自然とのかかわり等を通して感性を豊かにしていく。
- 様々な表現を生み出し、遊びの中でイメージ力を高めていく。
- 体を動かし、実感を伴って様々な感覚を身に付けていく。 など

このような営みが、小学校以降の「自覚的な学び（与えられた課題を自分の課題として切り替えていく力）」の基になっていきます。

学びの芽生え

自覚的な学び

学びの芽生えを支える土台となる力

「遊びにおける楽しさからくる意欲」「遊びに熱中する集中心」「遊びの中での気付き」



子どもたちはこのような生活や遊びの場面で  
学びの芽生えを支える土台となる力を身に付けています。

【発見！しずくの輝き】サトイモの葉の中央のくぼみにしずくがたまっているのを見つけ、「ねえ、見て！キラキラしている」「触ったら、ビー玉みたいに転がっちゃった！」と、周りにいる友達や保育者に目を輝かせて伝え、一緒にその発見を楽しんだ。

【ザリガニの池をつくろう】たらいで飼っていたザリガニの池をつくりたいと言う幼児たち。

園庭の隅に穴を掘ることにした。粘土質の土は、砂場の砂と異なり思うように掘れない。今までの経験から水を加えることで、土を柔らかくすることに気付いた幼児がバケツで水を運んでくる。

15センチほど掘ったところで、ザリガニを入れてみるが、すぐにはい出してしまふ。「もっともっと深く掘らなくちゃ」と力を合わせて一生懸命掘り進める。この日は掘ることに集中して片付けの時間になってしまったため、次の日の続きとする。



次の日、池作りに意欲的な数名が登園と同時に更に深くしようと掘り始める。しばらくたって「よし、水を入れてみよう」と掘ったところに入れるが、しみ込んでなくなってしまうのを見て、どうしたらよいのか考える。一人が「そうだ、先生、ビニル袋をちょうだい」と言い、掘った穴に大判のポリ袋を敷き、その上から土で固める。水を入れてみると、さっきよりは水がたまり、そこへザリガニを再び入れて「何か、ザリガニくんも喜んでいるみたいだね」と、みんな満足そうだった。

## 予想したり試したりして培われる思考力

3歳・4歳で経験の積み重ねがあると、幼児は、“こういう時にはこれを使うといい”、“こうするとこうなるかな”と自分なりに予想したり、友達の考えを聞いて、今までにやってみたことのない方法を取り入れたり、試行したりして関心を深めていきます。

【ドングリ転がし】土台の段ボール板にロール芯や空き箱を接着し、ドングリを転がすコース作りを楽しむ。遊んでいくうちに、スタート地点を増やしたり、台の傾斜を変えたりしながら、転がりやすくまた、転がった先に得点を付けるなどして、より遊びが面白くなるように考えを出し合い、転がり方を予想したり、何度も試したりして楽しんだ。

## 大きさ・形・長短・高低・量を認識する感覚

園生活の中では、日常的に積み木やブロックなどの遊具や空き箱・空き容器・牛乳パック・ペットボトルなどで様々な廃材や素材を扱って遊んでいます。それらのいろいろな形状のものを並べたり、積み上げたり、つなげたりすることによって大きさや形・長短・高低・量を感覚的につかんでいきます。

【キュウリの測定】大きく育ったキュウリの長さや重さを知りたくて、自分たちの身体測定で使った身長計や体重計で測ろうとする。しかし、それでは難しいことが分ると、他に何を使ったらよいのかを考える。「あっ、そうだ！ぼくの上靴、20センチだからこれと比べてみよう」「先生、職員室にあったこれくらいの（小型の測り）貸して」と、身近にあるものを使って比べたり測ったりすることに気付いた。

【サツマイモの収穫】皆で育てたサツマイモを収穫し、全部を一か所に集めた。

大きさ、形、太さ、長さは様々だった。幼児たちは大きさや長さを比べながら収穫を喜んだ。保育者と一緒に大・中・小の3つに分けていくうちに幾つあるのか数えてみたくなった。そこで、ひと固まりずつ、シートの上で並べて数え始めた。10まで数えると列を変え、新たに1から数え始める。

10個ずつの列がたくさん並び、大喜びの幼児たちだった。



## 学習の前に育てておきたい「話しことばの力」と「楽しい体験の中での数への興味・関心」

文字への興味・関心は、文字を学習する前にはとても大切です。しかし、興味をもっていない幼児に対して、押し付けるような文字指導は学習意欲を低下させます。

文字を学習する前に大切にしたいのは「話しことばの力」を育てることです。

“しっかり人の話を聞いて理解する”“自分の経験や気持ちを言葉で人に伝える”ことが必要です。幼児が自分から表現したいと思う、表現意欲の土台は「感動」と「共感」です。

生活の中に感動があること、表現した時に共感してくれる相手がいることが、「話しことば」を豊かにしていきます。そのためには、豊かな生活体験を積み重ねていきましょう。

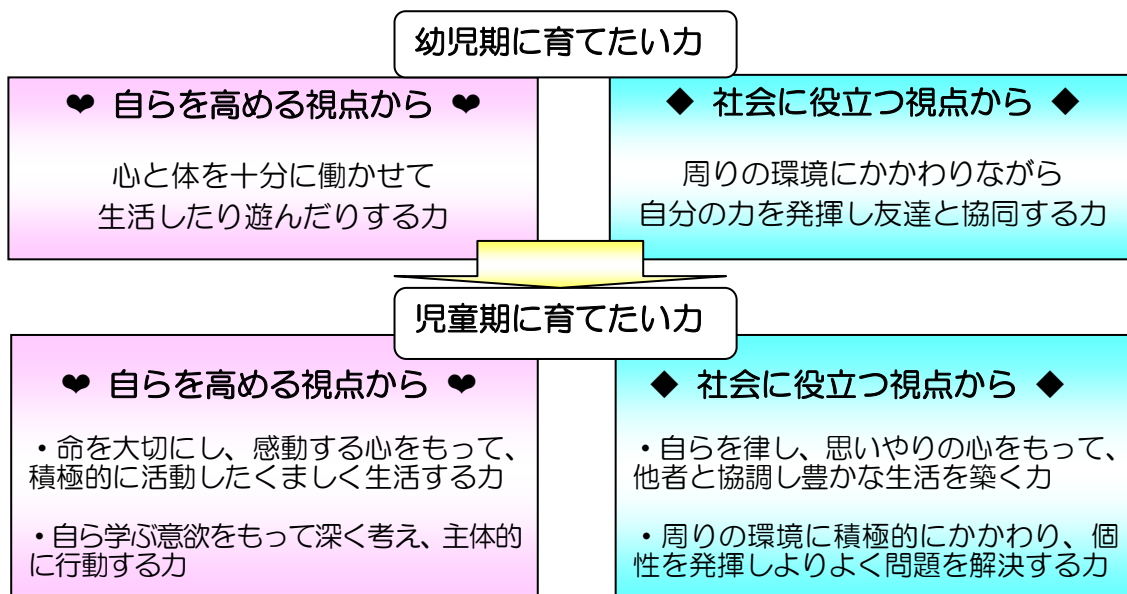


数への興味・関心は、幼児たちの“楽しい体験”を通して、自然に身に付いていくようにしましょう。早く計算ができるように教えようとするのではなく、幼児たちの主体的な生活や遊びの中で、数への興味・関心を引き出していくことがその後の学ぶ力を伸ばしていくこととなります。【参照P45・46】学ぶ力を育てる実践】

## 4 幼児期に育てたい力を確認しよう

### (1) アプローチ期に確認したい力

「愛知の幼児教育指針」では幼児期に育てたい力・児童期に育てたい力を、幼児期から児童期の子どもの発達や学びの連続性を踏まえて、「自らを高める視点から」と「社会に役立つ視点から」の二つの視点で捉えています。



上記の「幼児期に育てたい力」は幼児期全般を通して育てていく力であり、年長児のアプローチ期（10月から3月）においては、幼児一人一人にこれらの力が育ってきているかを確認していくことが大切です。

そこで、『アプローチ期に確認したい力』については、幼稚園教育要領・保育所保育指針で示されている、幼児期に育てる5領域における「心情」「意欲」「態度」を確認する必要があります。また、文部科学省から示された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）平成22年11月」に例示されている、次のような項目を基に、幼児の姿を具体的にイメージして、日々の保育を行っていく必要があります。

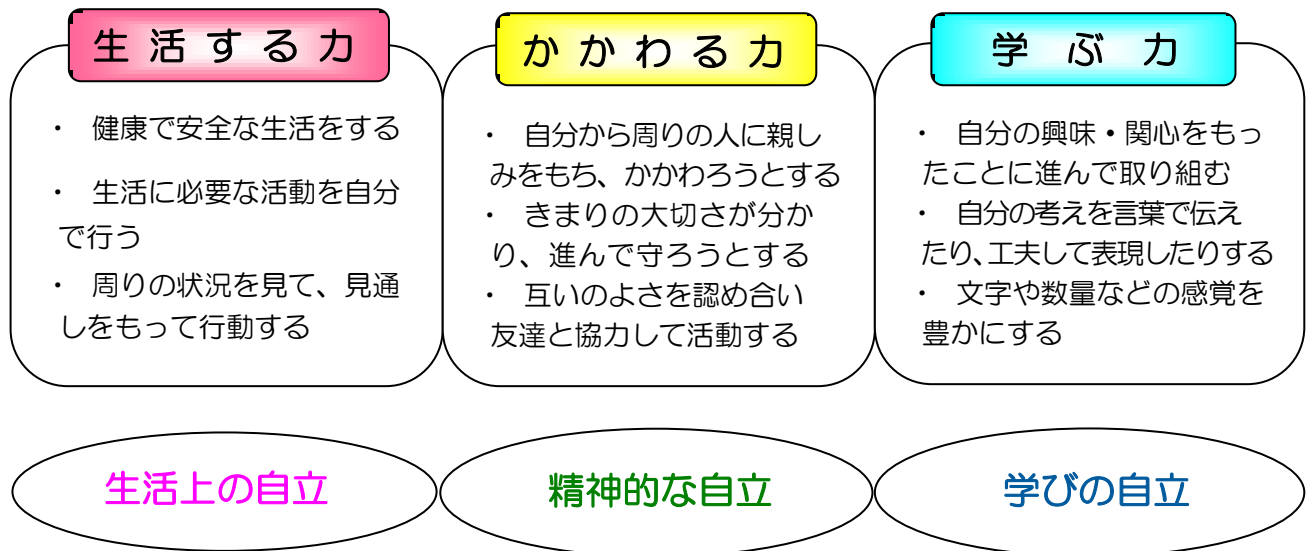
#### 【小学校につながる、幼児期の終わりまでに育てたいこと】

- |                      |              |                  |
|----------------------|--------------|------------------|
| (イ) 健康な心と体           | (ロ) 自立心      | (ハ) 協同性          |
| (ニ) 道徳性の芽生え          | (ホ) 規範意識の芽生え | (ヘ) いろいろな人とのかかわり |
| (ト) 思考力の芽生え          | (チ) 自然とのかかわり | (リ) 生命尊重、公共心等    |
| (ヌ) 数量・図形、文字等への関心・感覚 |              | (ル) 言葉による伝え合い    |
| (ウ) 豊かな感性と表現         |              |                  |



## (2) 児童期につなげる「三つの力」と「三つの自立」

幼児の姿を具体的にイメージして、日々の教育を行っていく上で大切なのは、どのような力が、どのように児童期につながっていくのかということを見通すことです。そのために、前ページの(イ)～(ウ)の項目を、「児童期につながる力」として、文部科学省の報告書に示されている、幼児期から児童期における『三つの自立』を基に次の「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の『三つの力』にまとめました。



【参照 P28・29 資料4 児童期につなげる幼児期の終わりまでに育てたい力】

これら『生活上の自立』『精神的な自立』『学びの自立』の三つの自立への基礎を養うこと（幼児期の教育との接続を図る上で重要な役割を果たす、小学校低学年の生活科の目標に通じる）は、愛知の幼児教育指針が示す「児童期に育てたい力」や、小・中学校で育てたい『生きる力』の「健康・体力」「豊かな人間性」「確かな学力」につながっていきます。

以上の幼児期から児童期にかけて育てたい力の概念図を次のP13・P14に掲載しています。

アプローチ期には、この時期にふさわしい「三つの自立」を養うことを目指すことが求められています。そこで、本会ではそれぞれの三つの自立のキーワードを次のように設け「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」と関連させながら、『生活や学びのつながり』を捉えました。

<b>生活上の自立</b> “自分のことを自分でしようとする”	<b>精神的な自立</b> “自分で自分のことをよいと思い身近な人にかかわろうとする”	<b>学びの自立</b> “面白いと思うことに自分から取り組み、表そうとする”
------------------------------------	------------------------------------------------	--------------------------------------------



幼児期に育てたい力

♥ 自らを高める視点から ♥

心と体を十分に働かせて生活したり遊んだりする力

- ・豊かな心情
- ・わきあがる意欲
- ・自立しようとする態度



◆ 社会に役立つ視点から ◆

周りの環境にかかわりながら自分の力を発揮し友達と協同する力

- ・共感する心情
- ・共通の目的に向かう意欲
- ・協力する態度



アフローキ期に

生活する力

- ・健康で安全な生活をする
- ・生活に必要な活動を自分で行う
- ・周りの状況を見て、見通しをもって行動する

かかわる力

- ・自分から周りの人に親しみをもち、かかわろうとする
- ・きまりの大切さが分かり、進んで守ろうとする
- ・互いのよさを認め合い、友達と協力して活動する

学ぶ力

- ・自分の興味・関心をもったことに進んで取り組む
- ・自分の考えを言葉で伝えたり、工夫して表現したりする
- ・文字や数量などの感覚を豊かにする

健康な心と体

自立心

協同性

道徳性の芽生え

規範意識の芽生え

いろいろな人とのかかわり

思考力の芽生え

自然とのかかわり

生命尊重・公共心等

数量・図形・文字への関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

# 児童期に育てたい力

## 確認したい力

### 生活上の自立

- ❖ 生活に必要な習慣や技能を身に付ける
- ❖ 身近な人や社会・自然にかかわり、よりよい生活を創り出す

命を大切にし  
感動する心をもって  
積極的に活動し  
たくましく生活する力

自らを律し  
思いやりの心をもって  
他者と協調し  
豊かな生活を築く力

### 精神的な自立

- ❖ 自分のよさや可能性に気づき意欲や自信をもつ
- ❖ 現在や将来の自分に夢や希望をもち、前向きに生活する

周りの環境に  
積極的にかかわり  
個性を発揮し  
よりよく問題を  
解決する力

## 学びの自立 ⇒ 学習上の自立

- ❖ 自分にとって価値があると感じられる活動を進んで行う
- ❖ 人の話をよく聞いて自分の考えを深める
- ❖ 自分の思いや考えを適切な方法で表現する

自ら学ぶ意欲を  
もって深く考え  
主体的に行動する力

### 学びの芽生え

楽しいこと  
好きなことに  
集中することで  
様々なことを  
学んでいく

### 自覚的な学び

集中する時間とそうでない時間の  
区別が付き、与えられた課題  
を自分のこととして受け止め、  
計画的に学習を進める

生きる力

健康・体力

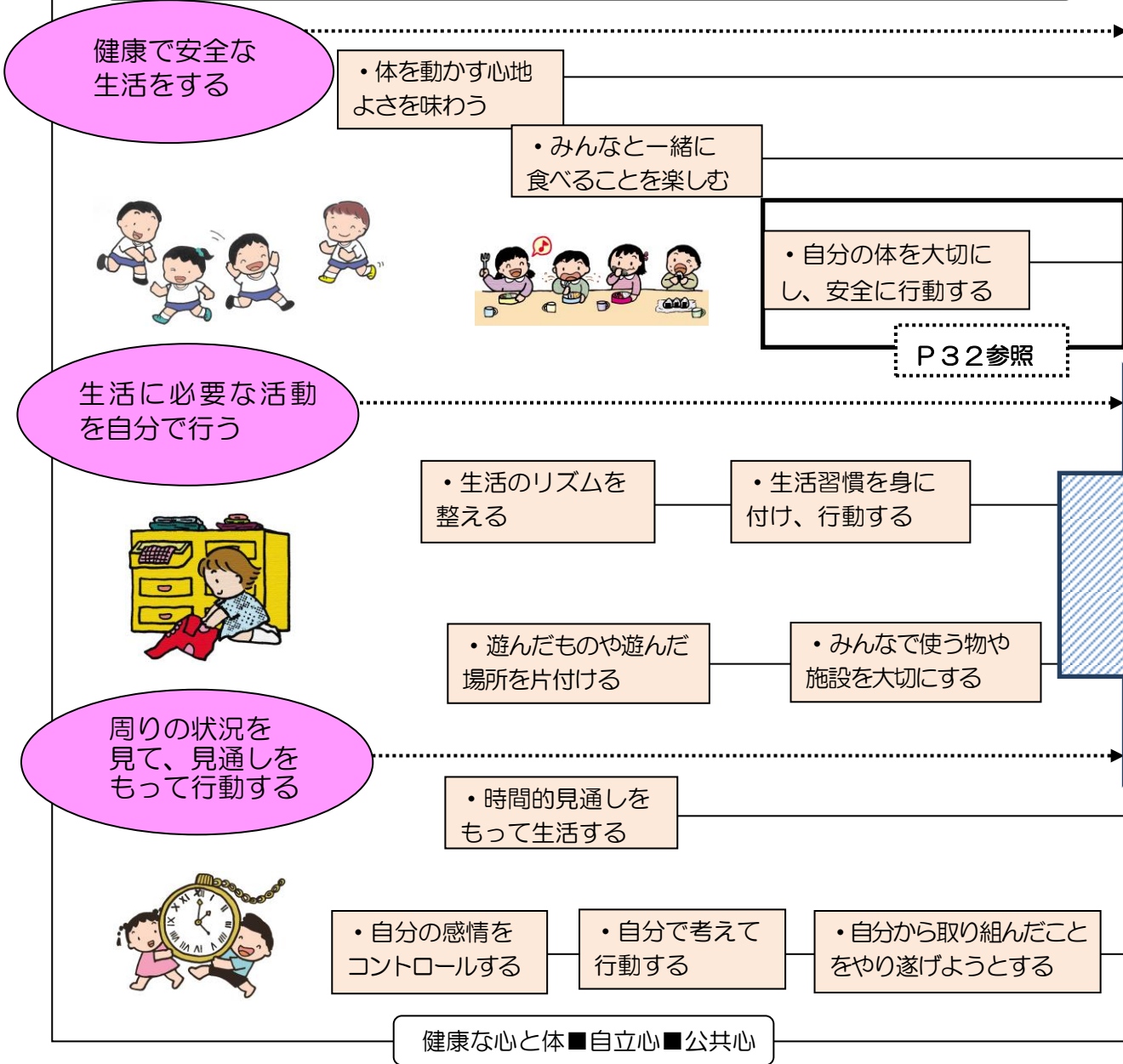
豊かな人間性

確かな学力

アプローチ期からスタート期へのつながり

生活する力 自分のことを自分でしようとする

幼稚園・保育所等 アプローチ期（10月～3月）の〈目指す子どもの姿〉

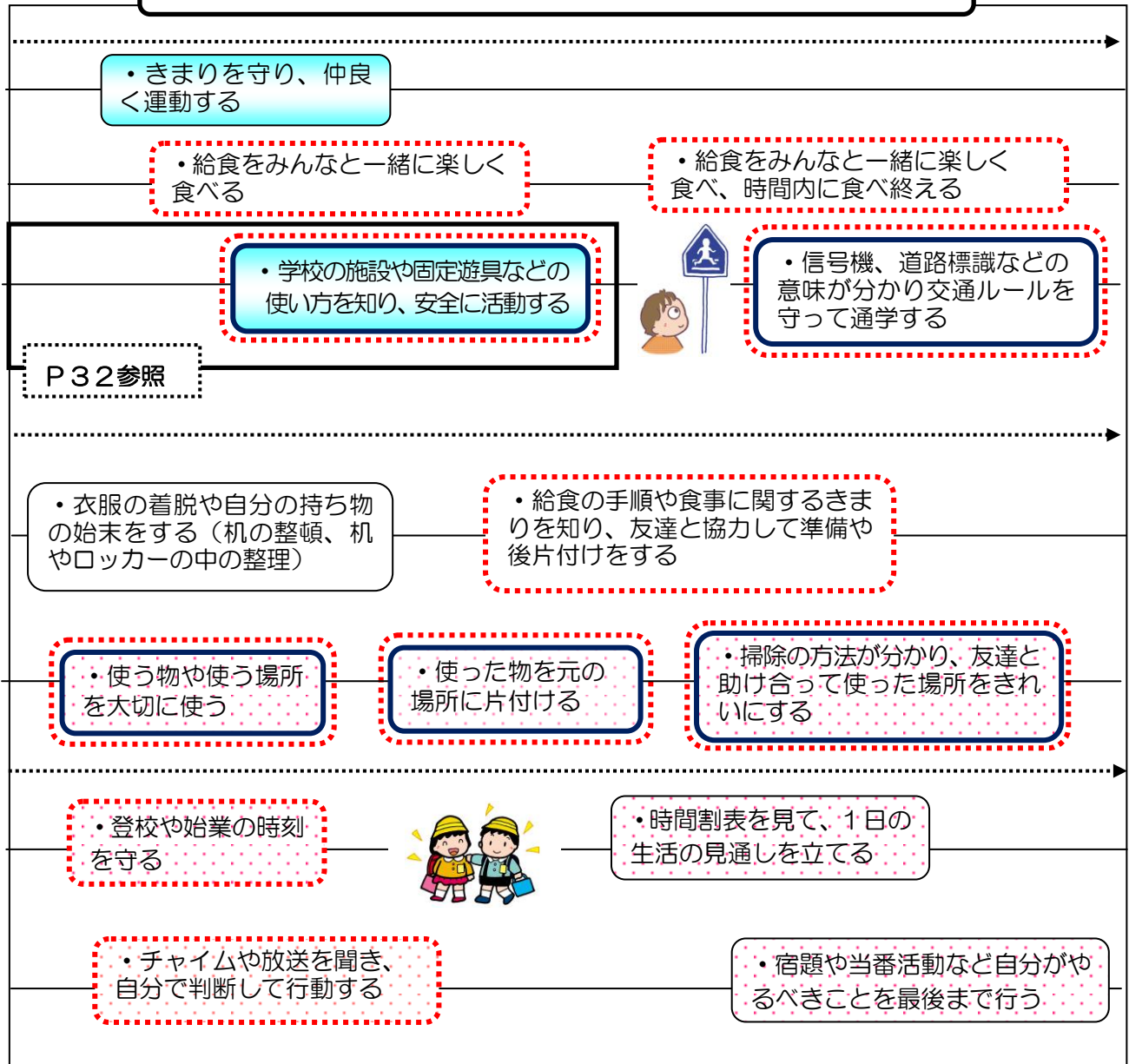


家庭との連携（アプローチ期）

- ❖ 規則正しい生活リズムをつくっていきましょう。
- ❖ 子どもとともに進んで戸外に出て遊ぶ機会をつくりましょう。
- ❖ 衣服の着脱・身の回りの物の始末など自分で行えるようにしましょう。
- ❖ 物を大切にして、使ったものを元の場所に片付ける習慣をつけましょう。

自分のことが自分ででき、新しい環境に慣れ安心して生活する

小学校 スタート期（4月～5月）の＜目指す子どもの姿＞



※ 教科等との関連

生活

特別活動

道徳

体育

日常生活の支援

（生活科を中心として、合科的に扱う教科等との関連を例示したものです。）

家庭との連携（スタート期）

- ❖ 通学経路を把握し、交通ルールを知らせ、安全に気を付けることを意識させましょう。
- ❖ 一緒に翌日の時間割を確かめ、用具の準備をしましょう。
- ❖ 家族と一緒に楽しく食事をし、保護者がマナーや食べ方の手本を示しましょう。

かかわる力 自分で自分のことをよいと思い、身近な人にかかわろうとする

幼稚園・保育所等 アプローチ期（10月～3月）の〈目指す子どもの姿〉

自分から周りの人に  
親しみを持ち、かか  
わろうとする



・自己肯定感をもち、先生や  
友達と信頼関係を築く

・自分が役に立つ  
喜びを感じる

・親しみをもって日常  
のあいさつをする

・園内外の様々な人と交流し  
触れ合い、親しみをもつ

きまりの大切さ  
が分かり、進んで  
守ろうとする



・生活や遊びの中で、自分た  
ちのきまりを守ろうとする

・よいことと悪いことがある  
ことに気付き、考えて行動する



互いのよさを  
認め合い、友達と  
協力して活動する



・友達と一緒に行動し  
気持ちを共感する

・友達と折り合いをつけ  
自分の気持ちを調整する

・自分の思いを相手に分かる  
ように伝え、相手の思いを  
聞いて分かろうとする

・友達と共通の目的に向かって力を  
出し合い、やり遂げた達成感を味わう

いろいろな人とのかかわり ■言葉による伝え合い ■道徳性・規範意識の芽生え ■協同性

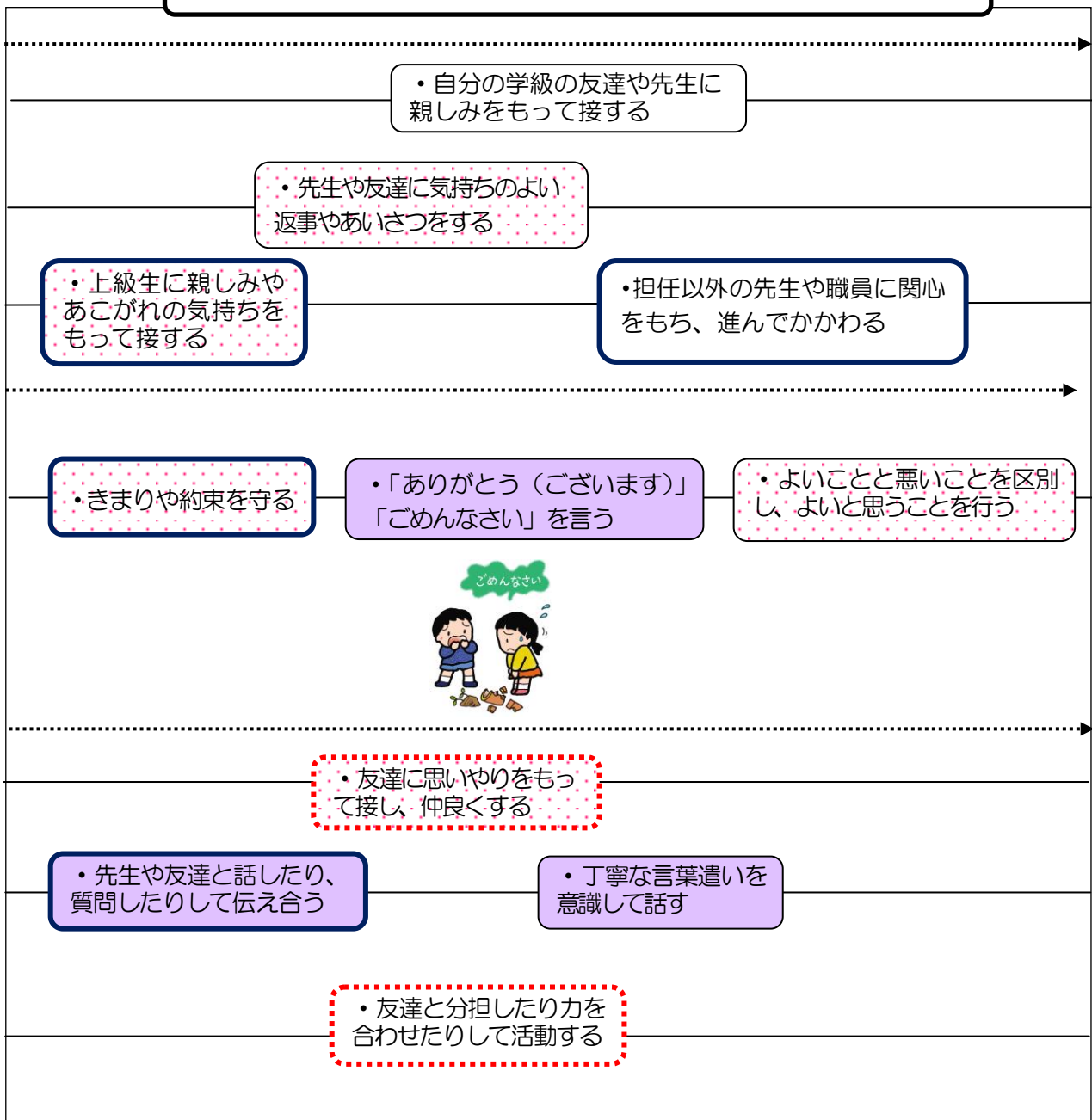
家庭との連携（アプローチ期）

- ❖ 園での出来事や、自分の思いや考えが話せるようなひとときをもちましょう。
- ❖ 家族と目を合わせてあいさつや返事ができるようにしましょう。
- ❖ 子どもと話し合って決めた家庭のきまりや約束を守らせるようにしましょう。
- ❖ してよいことと悪いことの基本的な区別を教えましょう。



身近な人に、思いをもってかかわろうとする

小学校 スタート期（4月～5月）の＜目指す子どもの姿＞



※ 教科等との関連

生活

特別活動

道徳

国語

日常生活の支援

（生活科を中心として、総合的に扱う教科等との関連を例示したものです。）

家庭との連携（スタート期）

- ❖ 子どもと一緒に保護者自身が積極的にあいさつをしましょう。
- ❖ 学校での生活の様子、学級の先生や友達のことなどを尋ね、会話を通して一日の子どもの姿を把握しましょう。
- ❖ 手伝いをするすることで、家族の一員としての自覚をもたせましょう。

# 学ぶ力 面白いと思うことに自分から取り組み、表そうとする

幼稚園・保育所等 アプローチ期（10月～3月）の〈目指す子どもの姿〉

自分の興味・関心をもったことを選んで取り組む

・考えたことを試したり工夫したりする

・自然現象や社会現象を生活や遊びの中に取り入れる



・生き物への愛着を感じ生命を大切にする

自分の考えを言葉で伝えたり、工夫して表現したりする

・気付いたり発見したりしたことを伝え合う

・先生や友達の話を聞いて理解する

・分からないことや知りたいことを聞いて理解する



・自分の考えやイメージをかいたり、作ったり、歌ったりして表現する

文字や数量などの感覚を豊かにする

・標識や、文字がコミュニケーションの手段であることに気づき、使おうとする

・絵本や物語に親しみ想像する楽しさを味わう



・遊びの中で数や量を比べたり、多様な形に興味をもったりする

思考力の芽生え ■ 自然とのかかわり ■ 生命尊重 ■ 数量・図形、文字等への関心・感覚 ■ 豊かな感性と表現

## 家庭との連携（アプローチ期）

- ❖ 身近な自然などに触れ、美しさや不思議さなどを子どもと共感しましょう。
- ❖ 子どもが興味をもって試したり工夫したりしている姿を見守り、子どもが自分で試せるような時間をつくりましょう。
- ❖ 子どもの発する疑問に答えたり一緒に考えたりしていきましょう。
- ❖ 生活の中で、文字や数などに触れて関心をもてるようにしましょう。

## 様々なことに自分から興味をもって取り組もうとする

### 小学校 スタート期（4月～5月）の＜目指す子どもの姿＞

・学校の動植物に関心をもってかかわる

・学校の施設で興味や関心をもった場所を見つける

・植物の栽培に興味をもち、意欲的に世話をする

・経験したことや気付いたことなどを話す

・相手や場面に応じて話す

・自分の気持ちや感覚を生かしながら楽しく絵をかいたり、粘土などで作ったりする

・紙の切り方を工夫して楽しい飾りを作る

・友達と声を合わせて歌ったり音楽に合わせて体を動かしたりする

・ひらがなに親しみ正しく書く

・姿勢や用具の持ち方を正しくして、丁寧に書く

・読み聞かせを、想像を膨らませながら楽しく聞く

・声の大きさやリズムを意識して音読する



・具体物や絵を見て数量への関心をもつ

・具体物を半具体物におきかえて数えたり、数の大きさを比べたりする

・5までの数について正しく数えたり、数字を読んだり書いたりする

・順番や物の位置を数字を使って表す

・5までの数の大きさをつかみ、合成や分解をする

◇半具体物…おはじき・数図ブロックなど

※ 教科等との関連

生活

国語

算数

図画工作

音楽

日常生活の支援

（生活科を中心として、合科的に扱う教科等との関連を例示したものです。）

### 家庭との連携（スタート期）

- ❖ 学校で、どのような学習をしたのかを尋ね、内容を把握しましょう。
- ❖ 場所を決めて学習するようにし、一緒に宿題をするようにしましょう。
- ❖ 分からないことは一緒に調べ、分かったうれしさを感じられるようにしましょう。
- ❖ 本（絵本・物語など）の読み聞かせを続けましょう。

## 5 指導をつなげよう

### (1) 5歳児後期から1年生に向けての指導のポイント

幼稚園・保育所等において、5歳児後期（アプローチ期）には、小学校1年生のスタート期の生活や学習の様子を見通して、一人一人がスムーズに移行できるような指導の工夫が必要です。そのためには、次のような点に留意して幼児の生活を見直したり、保育者としてのかかわりを心掛けたりしましょう。

#### ① 基本的な生活習慣が身に付いているか、家庭と連携して確認しましょう

- 自分の持ち物の始末、身の回りの整理・整頓、衣服の着脱、活動の準備・片付けを自分で行うことができるようにしましょう。
- 早寝・早起き、バランスのよい食事（朝ごはんを取る）、十分な睡眠、排せつなど、生活のリズムを整えていきましょう。
- 周囲の状況を見ながら、安全に気を付けて行動できるようにしましょう。
- 小学校生活に向けての、身辺自立の大切さを保護者に理解してもらい、家庭でも、規則正しい生活のリズムを整えていくよう働きかけていきましょう。



#### ② 時間の見通しをもって生活し、集団で活動する機会を増やしましょう

- 一日の生活の流れが分かって行動できるように、時計を図示して「かたづけ」「べんとう・きゅうしょく」など、幼児がすることを分かりやすく表示し、自分で意識したり、友達と知らせ合ったりして過ごせるようにしましょう。
- 1週間や1か月ごとのカレンダーを作成し、行事や幼児が楽しみにしている出来事などを書き込んで表示したり「あと、〇日だね」「△日には□□ができてるといいね」と知らせたりして、幼児なりに見通しをもって予定を意識できるようにしましょう。
- グループやクラスのみんなで取り組む活動（「お楽しみ会」「生活発表会」など）では、“今は、友達と一緒に〇〇をする、次は□□をしよう”などと、集団の一員として、自分がやるべきことを理解して、行動に移せるようにしましょう。



### ③ 自分の思いや考えを伝えたり、人の話に気持ちを傾けて聞いたりできるようにしましょう

- 幼児が自分の思っていることや感じたことなどを、話したくなるような雰囲気や場をつくりましょう。それには、幼児が伝えようとすることを理解し、温かく受け止める保育者のかかわりが大切です。



- 友達のよいところに気付き、言葉にしたり、友達と一緒に喜んだりする幼児の姿を、「友達のよいところや頑張っているところに気付けるあなたって素敵だね」と大いに認めていきましょう。他者から認められたうれしさは、「自己肯定感」を高めていきます。
- 人の話に最後まで耳を傾ける、話の内容を理解する、聞いたことを伝えることができるなど、日々の生活の中で、個々への丁寧な指導を積み重ねていきましょう。
- 椅子に腰かけて絵本を見たり、保育者の話を聞いたりすることに慣れていきましょう。

### ④ 遊びの中で数量・図形や文字への関心・感覚がもてるようにしましょう

- 数量や文字は、形で教えるのではなく、楽しい遊びや生活の場面で、幼児の興味・関心を引き出し、思わず数えたいくなる、比べてみたくなる、書いてみたくなる状況をつくり出していきましょう。
- 幼児は体験を通して感覚的に数量や文字を覚えていきます。大人から見ると、数量のとらえ方や、文字の書き方の誤りをすぐに指摘したくなりますが、幼児の興味・関心を損なわないようなかかわりを心掛け、一緒に考えたり、幼児に気付かせたりしていきましょう。

#### アドバイス

小学校の教師より



☆ できるだけ先に進んでおこうと小学校の先取りをしなくても大丈夫です ☆

幼稚園や保育所等でやるべきことを思い切り体験した子が小学校でも生き生き活動できます。また、完璧を目指さないことも大切です。幼児期にできるようになってほしいことはありますが、今はできなくても小学生になってからだんだんできるようになる子もいます。その子なりの育ちを温かい目で見てほしいです。小学校でも十分伸びます。

先生の指示通りに動く子がよい子というわけではありません。いろいろな場面で我慢することも大事ですが、自分を表現することも大切です。そのバランスがとても難しいと思います。大人の都合で抑制させすぎると、表現しない子どもになってしまいます。



## (2) 特別な支援を必要とする幼児への指導のポイント

特別な支援を必要とする幼児が生活するには、心情の安定を図ることが大切です。特に、小学校へ移行するこの時期は、幼児が徐々に生活リズムを整え、教師や仲間と安心して過ごすことができるようになる必要があります。

まずは、個々の幼児の発達の姿を、その生育歴も踏まえ、これまでの育ちについて知ることが大切です。そのために個々の状況に応じて、個別の指導計画・個別の教育支援計画を作成し、関係機関との連携を図り、情報を共有しましょう。



### ① 幼児の困り感を見逃さないようにしましょう

幼児の言動から、気になることがあるときには、よく見てその特性をつかむことが大切です。

また、幼稚園や保育所等では気にならなくても、小学校という大きな集団の中での姿を想定したとき、その子自身が困ってしまわないだろうかという目で見えていく必要があります。

### ② 得意なこと（好きなこと）と苦手なことを把握しましょう

どの子にも、得意なことや苦手なことがあります。大きな音だったり、狭い場所だったり、急な予定の変更だったり、その子によって苦手なことは違います。どんなとき、どんなことが苦手かが分かっているだけでも、その子が困ってしまう前のある程度対処できます。また、パニックになりそうなときに、心が落ち着くものや好きなものについて、幼稚園・保育所等の全職員がその情報を共有していると、いろいろな場面で役立ちます。

### ③ 保護者とともに支えましょう

日頃から保護者との信頼関係を築き、保護者に幼稚園・保育所等での様子を丁寧に伝えていく必要があります。その子のことを大切に考えていることを伝え、保育者側が困っているのではなく、“その子が困っていることについて、保護者と一緒に支えていきたい”という温かく肯定的な姿勢が大事です。

### ④ スモールステップで丁寧に教えましょう

周りの状況を見ながら行動することが、とても苦手な子どもたちがいます。周りの友達のまねをしながら、ルールやマナーなどを身に付けていくことは難しいと思われれます。小さなステップで一つずつ教え、小さなことでもできたらほめることが大切です。できないことばかり見て、注意したり叱ったりすると、かえって逆効果になってしまいます。

## ⑤ チームで支援しましょう

チームで、その子の困り感を共有し、うまくいった支援方法や失敗した方法などの情報交換をし、支援方法を探っていくことが必要です。また、専門家にも相談しアドバイスを受けるとともに、障害について研修を重ねて保育者一人一人の資質の向上を図ることも大切です。

## ⑥ 小学校入学に向けて支援情報を引き継ぎましょう

支援にかかわる情報を共有し引き継ぐことが重要です。小学校入学前に、保護者と幼稚園・保育所等及び家庭の様子を情報交換しながら、その都度支援について共通理解し、支援計画についても見直しをしていきます。この支援計画を基に、小学校の先生とその子の具体的な支援情報「このようとき、こうすると、うまくいく」などを早めに共有することが大切です。

支援情報の引継ぎは、小学校における個別の教育支援計画などの作成と活用の充実につながります。



対応の仕方は一人一人で異なります。その子にあった支援の方策を、いろいろなかかわりから、探っていきましょう。【参照P 35・36 特別な支援が必要な幼児への実践】

### エピソード

#### 《自主活動後、なかなか保育室に戻れないA児とのかかわりから》

自主活動後の片付けを終え、子どもたちが保育室に集まってきましたが、A児は職員室でメダカを見たり主任に話しかけたりして保育室に帰ろうとしません。

保育カウンセラーの先生から、“自分で時間を決めさせ、決めたことを守らせるとよい”との指導を受けていたので、主任が「Aちゃん、長い針が何になったらお部屋に帰る？」と対応していました。

それを何度となく見ていた、同じクラスのB児が、「先生、私が呼んできてあげるわ」と言い、職員室にいるA児のそばに行き、穏やかな声で「Aちゃん、長い針が何になったらお部屋に帰る？」と聞きました。すると、A児は時計を見上げ「ん…。3になったら」と答えました。B児が「分かった。3になったら迎えに来るね」と言うと、A児は「うん、分かった」と返事をしました。

15分になり、B児が迎えに来ました。「Aちゃん、3になったよ」A児は「うん、分かった」とB児と手をつなぎ、あっさりと保育室に帰って行きました。

子どもたちは、保育者のA児へのかかわり方を見て、“Aちゃんには、こうするといいんだ”とかかわり方を学んでいきます。日頃から、保育者が意図して特別な支援を必要とする幼児に接していく姿勢を示していくことが大切です。

## 資料 1

### スタートカリキュラムとは

幼児期の教育から小学校教育へスムーズな移行ができるようにすることを旨としたカリキュラム編成の考え方であり、義務教育のスタートが適切に行われることを願った小学校入学以降のカリキュラムのこと。

「小学校学習指導要領 生活編」では、「スタートカリキュラム」という用語が明記されている。幼児期の遊び中心の生活経験を踏まえた、合科的・関連的な学習の導入が低学年に必要であり、その中核を担うのが生活科であることが強調された。

「小学校学習指導要領解説 生活編」P45

（国語科、音楽科、図画工作科など他教科との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。）

今回の改定において加えられた「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をする」とは、下記の第3との関連が深い。

記

第1は、生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすことである。

第2は、他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすことである。

第3は、教科の目標や内容の一部について、これを合科的に扱うことによって指導の効果を高めることである。

いわゆるスタートカリキュラムとは、児童が義務教育の始まりにスムーズに適応していけるようなカリキュラムを構成することです。例えば、小学校第1学年において、教科を横断した大単元から各教科の単元へと分化していく教育課程を編成することが考えられます。具体的には、生活科において学校を探検する学習活動を行い、そこで発見した事柄について、伝えたいという児童の意欲を生かして、国語科、音楽科、図画工作科において、それぞれのねらいを踏まえた表現活動を行うなど合科的に扱うことが考えられます。

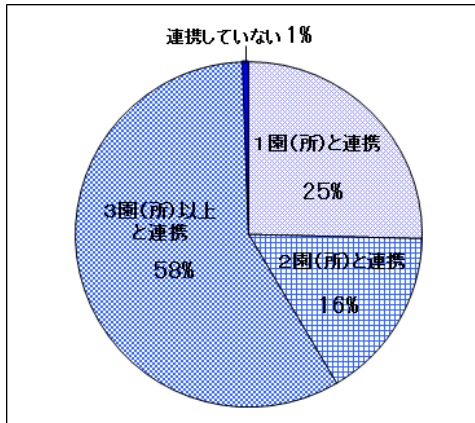
<文部科学省ホームページQ&Aより>

## 資 料 2

### 愛知県における幼児教育と小学校教育の連携・接続の取組について

愛知県教育状況調査（H25. 9月調査）

#### 平成25年度調査



・平成24年度の調査と比較し、「連携していない」と回答する学校数が平成24年度（14校）から平成25年度（4校）に減り、幼保小の連携は進んでいる。

・3園（所）以上と連携している学校数が増えている。

（平成24年度 383校  
→平成25年度 410校）

子どもの発達や学びの連続性を保障するため、

\*「連携」とは、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校が、連絡を取り合い、幼児と児童の交流活動や保育者や教師が、互いの保育活動や教育活動を見合い話し合う場をもつなどの取組

\*「接続」とは、幼稚園・保育所・認定こども園において、幼児期に育てた心情・意欲・態度が小学校の児童期において、学習や生活につながっていくための教育課程の編成・実施等の取組

#### 市町村教育委員会における幼児教育と小学校教育の連携・接続の取組の状況

ステップ	取組内容	該当市町村数
ステップ0	連携への予定・計画がまだない。	0（0%）
ステップ1	連携・実施に着手したいが、まだ検討中である。	8（15%）
ステップ2	年数回の授業、行事、研究会などがあるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。	37（70%）
ステップ3	授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。	6（11%）
ステップ4	接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。	2（4%）

合計53市町村  
(名古屋市を除く)

ステップ0から4は『連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安』

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方（報告）平成22年11月11日文科部学省」より

## 資料 3

### 学びの芽生えの時期から自覚的な学びの時期への円滑な移行

#### 学びの芽生えとは・・・幼児期における遊びの中の学び

学ぶということを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいくこと。

#### 自覚的な学びとは・・・小学校における各教科等の授業を通じた学習

学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別がつき、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めること。

幼児期は 自覚的な学びへと至る前の段階の発達の時期であり、

この時期の幼児には

「遊びにおける楽しさからくる意欲」

「遊びに熱中する集中心」

「遊びでのかかわりの中での気づき」

学びの芽生え



自覚的な学び



幼児の終わりには、自覚的な学びの芽生えが育ってきており、このため、教科指導こそ行わないものの、気の合った仲間同士の活動だけでなく、クラスにおける共通の目標を意識したり、自分の役割を理解したりして、集団の一員としての自覚を育てる活動を重視したり、今まで遊びを通して学んできた知・徳・体の芽生えを総合化し、小学校に向けて学びを高めていくための教育課程の編成・実施が必要となる。

文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）H22.11.11」より

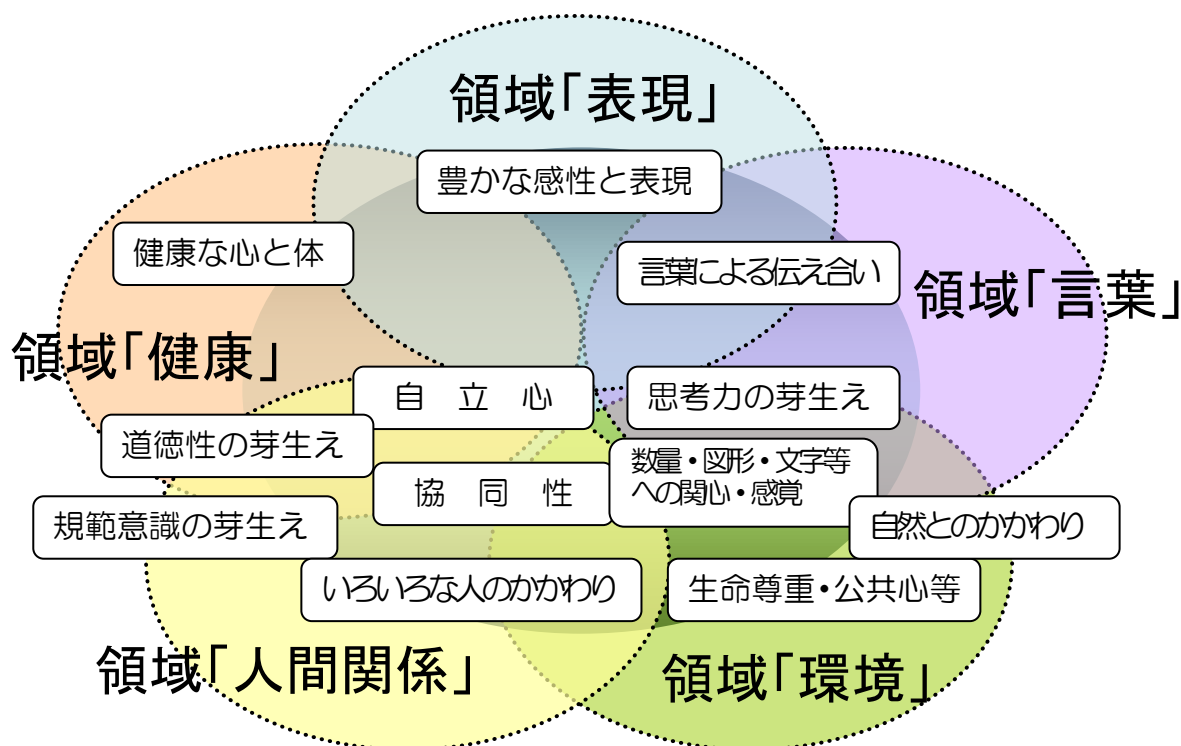


## 資料 4

### 児童期につなげる幼児期の終わりまでに育てたい力

アプローチ期には、下の図の5領域における『幼児期の終わりまでに育てたいこと』の「12項目（「健康な心と体」「豊かな感性と表現」など）について、幼児の姿を具体的にイメージして、日々の教育を行っていく必要がある。

幼稚園教育要領・保育所保育指針で示されている  
幼児期に育てたい **心情** **意欲** **態度**



文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）H22.11.11」より作成

### 児童期につなげる「三つの力」

上記の領域における幼児期に育てたいことの項目を下の『生活する力』『かかわる力』『学ぶ力』の三つの力にまとめ、これらを「アプローチ期に確認したい力」とする。

生活する力

かかわる力

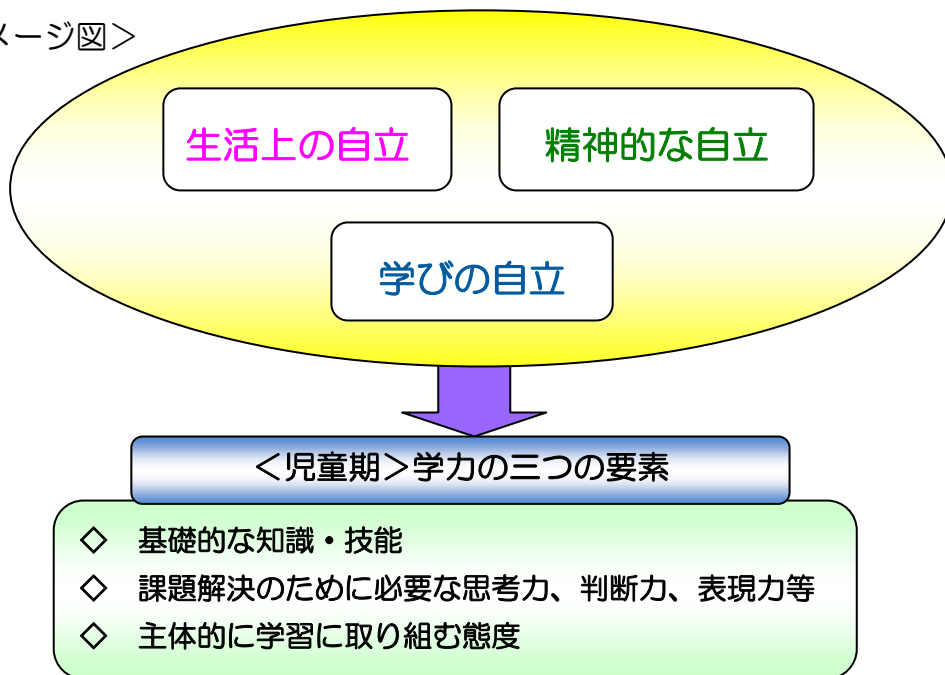
学ぶ力

## 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」

幼児期（特に幼児期の終わり）における学びの基礎力の育成において重要であるのは、幼児が人や物に興味をもち、かかわる中で様々なことに気付くとともに、それらを深め、広げていく過程の中で自己発揮と自己抑制を調整する力を育むことであり、それらを通じて、個人として、また社会の構成員としての自立への基礎を養うことである。

具体的には『学びの自立』『生活上の自立』『精神的な自立』の三つの自立を養うことである。この幼児期の「三つの自立」の育成が、児童期の『三つの自立』や『学力の三つの要素』の育成につながっていることを踏まえ、今の学びがどのように育っていくのかを見通すことが重要である。

<イメージ図>



幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えと自覚的な学びの両者の調和のとれた教育を展開することが必要である。例えば、幼児期の教育においては、「調べる」「比べる」「尋ねる」「協同する」などの様々な手法を組み合わせ、楽しみながら課題を見だし解決する取組を通じて、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識へとつながっていくよう、学びの芽生えのための活動を展開することが求められる。